

親を育てる

—モード論の視点から—

庄 司 一 子

問 題

近年、子どもの虐待（以下虐待）が社会問題となっている。厚生省の調査によると一九九七年度に全国の児童相談所に寄せられた虐待についての相談件数は五、三三二件で、調査を始めた一九九〇年度の約五倍に増加しているという（朝日新聞、一九九九年一月一六日）。虐待は、被害を受けるのが子どもであり表面に出て来にくい問題であるため、明らかにしているのは氷山の一角とされている。暗数はどれくらいあるのか計り知れない。地域の乳幼児学級などで話をする機会があるが、虐待寸前だ、と集団討議で訴える母親が少なからずいることも事実である。

子育てを行っている親（養育者）は、初めから親とし

て完成しているわけではない。生活共同体であった村中心の社会が崩壊した現代の大人にとって、子どもは大人の生活に突然入り込んでくるほとんど未体験の存在である。それは子育てを経験したものであれば誰でも感じることであろう。新生児のいる初めての生活は、毎日が試行錯誤と不安の連続である。氏家（一九九六）によると、初めて親となった経験はストレスの連続である。また柏木（一九九五）は、育児によって親が多くの不安とフラストレーションを受けると指摘している。

こうした親のストレスや不安やフラストレーションは、親がよい親であろうとし、子どもに夢や期待をかけ（柏木、一九九五）、子どもに健康に育って欲しい、幸せになつて欲しい、という願いにその一因がある。つまり、いい親であろうとするほど、また、子育ての難しさや自分の親としての未熟さに直面するほど、子どもに「いい子」

であることを要求し、同時に親が親として未熟な自分を責めるということが起こりうる。これが育児による過剰なストレスやフラストレーションとなり、虐待につながる一因となるのではないか。

虐待がなぜ起こるかについての説明はいくつかある (McCrae & Costa, Jr. 1994 ; 神庭、一九九四 ; 坂井、一九九四・斉藤、一九九四・莊巖、一九九七) が、子どもの虐待の問題は、おとなが親になることの難しさを考える上で、またおとなが親として成長発達することを考える上で、多くの臨床的示唆を与えるものである。本稿では、親による子どもの虐待を論じながら、おとなが親になることとその難しさ、またおとなにとって親になることとがどのような意味をもつのかについて、おとなの成長発達のプロセスに焦点をあてて論じたい。

子どもを育てる体験と親

個人の人生には固有のストーリーがある。固有の一回きりの人生を歩みながら、人はさまざまなことを体験し、学び、意味づける。精神病質で犯罪を繰り返す人は、過去の経験にこだわらず、学ぶということもないため、同

じ失敗を何回でも繰り返すという (神田橋、一九九二)。つまり、一般に人は過去の経験からさまざまなことを学び、意味づけ、後の経験に生かすのである。個人の経験は、個人の固有のものであり、個人によって固有に意味づけられる。したがって事例研究によって検証されるように、個人の生育歴は固有の経験によって特徴づけられ、形成される。さまざまな人生に原理や共通性を見いだそうとすることが心理学であり、発達心理学であるなら、その人固有のあり方を見つめ理解するのが臨床学である。従来の発達理論における親子関係の理論では、親がどのように育てれば子どもがどのようになるかを予測する。これまでの育児論はこうした発達理論に基づく子育て論であった。Freud の精神分析にしても、Bowlby のアタッチメント理論にしても、乳幼児期の母親との関係が後の発達に大きな影響を及ぼすとする考え方である。こうした発達理論は、母親が子育てに中心的役割を果たし、またそれが望ましいことを裏づけるものであった (柏木、一九九八)。しかし、子どもの発達理論も変化している。同時に児童観や子ども像も、働きかけられる受け身の存在としての子ども観から、生まれつき有能で積極的に環境に働きかけ、その影響を取捨選択する積極的な存在と

しての子ども観に変化している。それはたとえば Emlin の乳児の知覚実験などに見られる。また Chesel & Thomas (1987) の乳児の気質研究によって、親子関係が親から子どもへの一方的なとらえ方から、子どもの持つもともとの気質が親の子育てに影響し、子育ては親子の相互作用であるにとらえられるようになってきた。

父親の子育てへの関与と参加が増加しており、父親と母親の役割行動が「似てきた」と言われているが(大野、一九九八)、実際には、子育てを中心的に担っているのは主に母親である。父親の子育てへの参加と関与は、男性中心の社会では、あくまで母親の補助でしかない。母親は子育てを中心的に行う者として重視され、問題が起った場合、問題に直接かわかる人として問題視されるのが現状である。それはたとえば「母性」や「母性本能」などといった表現に端的に表される。同時に、子育てで観が変化したとはいえ、まだまだ「母性神話」「よい母親像」が社会的に存在しており、よい母親でなければならぬと思うことで、自分を責め、苦しむ母親は多い(鈴木、一九九六)。これはたとえば、出産時に痛みを感じてもそれは「当たり前」と医師や助産婦に対応されることや、「お産の苦しみを経験してこそ母親になれる」といっ

た風習に見ることができると。また斉藤(一九九四)は、これを次のように指摘する。『社会の中でもっとも原初的なものは、言葉を介することもなく文化の中に浸透し、そこに生きる人々の心の内面に入りこむ。『母たる者は子を愛さなければならない』という掟は、この種の掟であり、女性たちを心の内面から支配している。』

こうした掟である「母親神話」「よい母親像」が存在する中で、子育てに困難を感じ、親として完全でない自分に自己嫌悪に陥っている母親は、孤立し、ネットワークを作ることができず、子どもと二人きりの世界に閉じこもる。これが子どもへの虐待の可能性を高める一つの要因となる。莊厳(一九九七)も、「虐待に走る親は、いわゆるソーシャルサポートネットワークが十分に機能していないことも多く、これが発見を遅らせる原因ともなっている」と述べる(九三頁)。

相談室で出会った親との面接は、孤立化し、サポートのなかなか得られない親と子どもの問題、親としての悩みや苦しみを共有し、一緒に考え、共に育つ過程としてとらえることができる。親にとって子どもを持つ意味、そしておとなが親として成長発達することとはどのようなことなのであろうか。

生涯学習の時代と言われているが、これは「学びたい人が、いつでも学びたいときに、学びたいことを学べる」社会をめざす標語であろう。しかし、これは「学ぶこと」を学習や学問にとらえ、「学びたい人」だけのものとしていないだろうか。同時に「学ぶ必要のある人」を子どもだけに限定していないだろうか。義務教育というが、社会は、社会を構成し、社会に貢献する大事な一員としての「子どもを育てる人」、すなわち「親や保護者」を育てるべきであると考ええる。子どもがどのような大人になるかは、教育によるところが大きいが、同時にどのような親に育てられ、どのような大人と接し関わるかも重要な問題だからである。多くの虐待に関する報告・理論は Bandura が社会的学習理論で指摘するように、虐待する親は小さい頃虐待を受けた経験を持つことを指摘している。斉藤（一九九四）は、「あつうの大人は、放っておけば子どもを情緒的に身体的にか、虐待してしまうものというくらいに考えておいたほうがよい。父親も母親も児童を虐待するし、年上の同胞もする。祖父母も伯父伯母も…（中略）やっている本人でさえ、それとは自覚できていないだろう。」（一一頁）。と述べ、児童虐待は「問題が問題として見なされてこなかったというだけのこと

である。」（一三頁）と指摘する。そうであるなら、児童虐待は大人が意識的に解決すべき重要な課題であろう。そのためには、記述のように親や大人を、子どもを教え育てる存在として「育てる」必要があると考える。何も「問題を起こした子どもの親」だけが問題なのではない。そのためには、女性の中の掟となった社会の文化としての「母親神話」「よい母親像」を崩すことから始めなければならないのではないだろうか。

ところで、親ははじめから「親」である訳ではない。さまざまな子育て経験を重ね、それを子どもと共有して親になる。子どもから見れば、親は常に親であり、その意味においては安定した完成した存在であろうが、親は親としてもおとなとしても変化し続ける存在である。発達心理学の領域では、児童期・青年期、乳児研究、老年期研究が盛んに行われてきた。近年は adulthood の発達に関する研究が盛んに行われている。それはたとえば、feminism 研究の影響であったり、近代化に伴う家族関係の変化による家族学の研究、Lamb (1975) の父親研究によって行われるようになった。柏木（一九九五）は、発達心理学の中で親自身が問題とされることなく、もっぱら子どもの発達との関係でのみ取り扱われ、子どもの発

達に影響を与えるものとして研究されてきたことが、研究の対象、視点、問題の設定などにおいて問題と限界をもっている、と指摘している（一八頁）。さらに子どもにとっての親は存在するが「親にとっての子どもとは何か」という問題が無視され、人間としての親が存在しないという。

このように、発達研究においては、親の発達、おとなの発達については発達心理学の領域ではあまり論じられてこなかった。一見安定しているように見えても実は「adulthood」は人生の主要な選択を行うとともに、職業や家族関係、社会経験においてさまざまな重要な課題や問題と向き合う時期であり、「adulthood」の経験や影響は後になるほど修正しにくく、同時にその機会も減少する可能性がある。

現代は対人関係が希薄化していることが一つの教育の大問題であり社会問題でもある。夫婦関係と親子関係にはこの対人関係の問題が端的に現れると考えられる。配偶者と子どもとの関係は「adulthood」にある個人にとって最も身近な存在であり、個人空間に入り込む存在だからである。したがって、近年は夫婦の別居も増えつつあると言われているが、配偶者とどう関わるのか、子どもと

どう関わるのかは、その個人がどのような対人関係をとっているか、あるいはとってきたかが如実に現れると考えられる。

親はどのようにしてどのような親になるのか

では、親がどのような親になるかについての説明理論にはどのようなものがあるであろうか。氏家（一九九六）は次の五つをあげる。

（一）精神分析：Freud によれば、人格の基礎は幼児期に形成される。親としてどのような行動をとるかは個人の幼少期の体験にルーツがあると考ええる。しかも個人によって幼児期の問題は抑圧され、意識化されない。したがって、親がどうしてそのようにふるまうかは、かなり古い過去にさかのぼって検討しなければならない（Grossmann, Fremmer-Bombik, Rudolph, & Grossmann, 1988; Main, 1991; Main, Kaplan, & Cassidy, 1985; Fraiberg, Adelson, & Shapiro, 1975）。個人が過去の体験の中で作り上げた自分自身と他者との関係や世界についての主観的期待（internal working model）と親行動が関連する、とする考え方。強い情動体験にいろどられると、抑圧さ

れて意識化されず、測定することもできない。

(二) 経験主義的考え方・

二一 モデリング理論・母親行動はその母親行動をモデルとして世代間で伝達されるとする考え方 (Grossmann et al., 1988, Biringen, 1990)。

二二 アタッチメント理論・Bowlby (1969, 1980) は、個人の発達史の中で積み重ねられてきた経験を重視する。Bowlby のアタッチメント理論の枠組みでは、子どもの行動を規定する要因として親とのアタッチメント、親の養育態度をあげる (Main & Hesse, 1990)。

(三) ストレス理論・母親が経験しているストレスと精神衛生 (ex. うつ) が養育行動と関連するとする考え方 (Arizmeni & Afonso, 1987; Ventura, 1987; Curtona, 1984; Simons, Lorenz, Wu, & Conger, 1993)。

(四) 過去の古い体験と現在の条件 (ストレス) との相互作用論・子育てに深刻な問題を抱える母親は、子どもの頃、よくない体験をもっている (Quinton & Rutter, 1988) と同時に、それが現在の母親の現在の子育ての深刻な問題やそのほかのさまざまな問題とつながっているとする考え方。たとえば、子どもの頃の親との離別により、親子関係が十分に形成されないため、その結果とし

て早く親の元を巣立つことになる。しかし不十分な親子関係に起因する社会での対人的な問題が生じ、これが慢性化して結果として早めの結婚・出産を迎える。しかし、これが配偶者との不安定な関係、子育ての深刻な問題につながる、という問題である。これは、Caspi & Elder, Jr. (1988) の世代間伝達路図 (図1) に見ることができ。この図は、不安定な個人→夫婦の葛藤→母親としての適切な行動難しい↓子どもは母親の特質を一部遺伝、一部経験的に受け継ぐ。しかもこれが4世代反復することを示す図である。

(五) 新しい説明モデルとしての連鎖反応モデル・主効果モデルでもなく相互作用モデルでもない連鎖反応モデル (transaction model) による説明である。これは、あるできごとが、それまでの経験や変数による影響として直接的に説明できないとき、小さなできごとや要素の連鎖が、新たな意味を作り出しながら全体としての変化を引き起こすようなシステムの動的性質 (transaction) が現実認識や評価様式の突然の変化を引き起こす、とする考え方である (氏家、一九九六・図2・図4参照)。

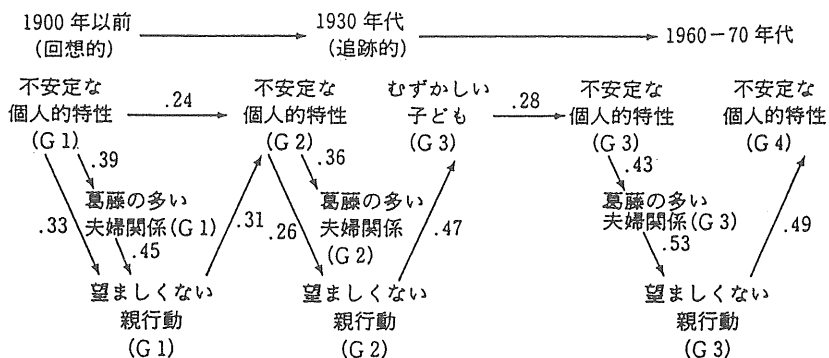


図1 バークレー研究による行動および関係上の問題の世代間伝達経路 (Caspi & Elder, Jr., 1988 ; 氏家, 1996 より)

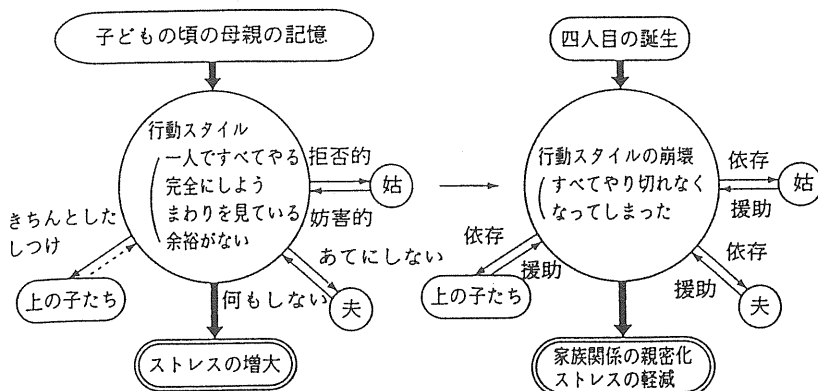


図2 子どもの誕生による家族システムの変化 (氏家, 1996 より)

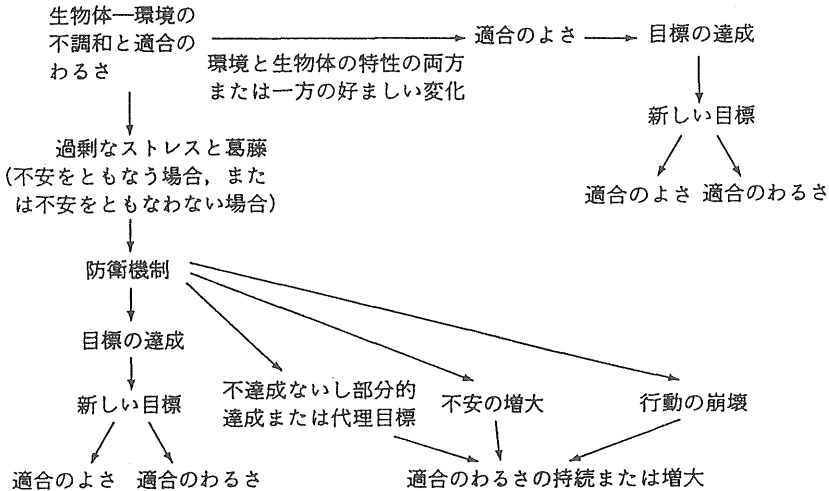


図3 適合のわるさを中心にしたトランザクションモデル
(Chess & Thomas, 1980 ; 氏家, 1996より)

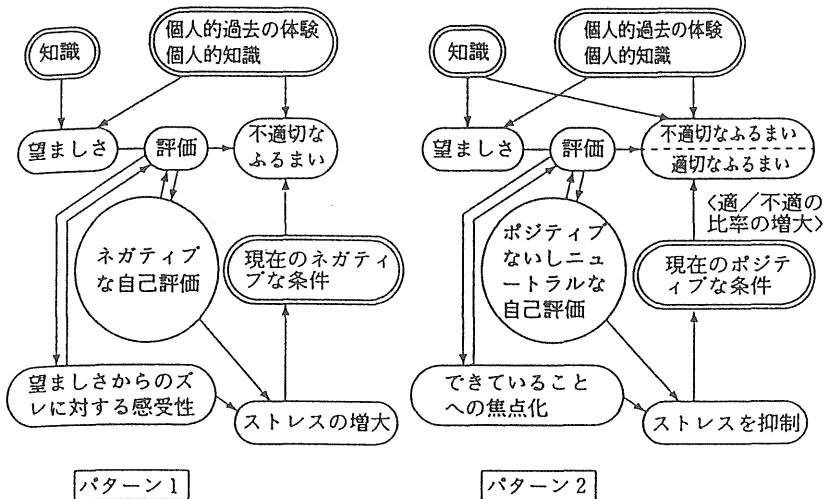


図4 循環的トランザクションの二つのパターン (氏家, 1996より)

親はどのように成長するのか

親が子どもを産み育てることによって、親にどのような変化が生ずるのであろうか。図5は、柏木（一九九五）が、幼児を持つ親との面接と自由記述から親になることの成長・発達を具体的に明らかにしたものである。この図から「柔軟さ」「自己抑制」「視野の広がり」「運命・信仰・伝統の受容」「生き甲斐・存在感」「自己の強さ」といった側面の親の成長・発達が示されている。柏木は育児に見られる「育自」とは、人格発達・成熟に至る営み、としている。同時に、科学技術の進歩により、科学万能感、自分の力への自信、過信が、育児によって人知を越えたものの存在を認め、生命への畏敬の念を抱くようになることが、親の発達の中でも、今日特に重要だと指摘する。

育児による人間としての深まり、人知を越えた生命への畏敬の念を抱きつつも、現実には、子育てが思うようにうまくいかないことに苛立ちながら、親は子育てをしている。それは既述の「母性」や「母親神話」に象徴される、社会が作り上げた母親自身の中に存在する「よい

母親像」と現実の母親としての自分の行動との葛藤である。さらに柏木（一九九五）は育児への親の感情を調査し、母親も父親も「育児への肯定感」を味わうのに比して、母親は「子どもから解放されたい」「子どもを育てることは負担だ」といった「育児による制約感」が父親よりも有意に高い、と報告している。母親は育児への肯定的積極的な気持ちと同時に否定的感情も強く持っており、アンビバレントな葛藤を味わっている、としており、これは父親には見られない、母親特有のものであることを明らかにした。これによって母親は、「自分はだめな母親ではないのか」「この苦痛に耐えられないのは自分だけだ」（鈴木、一九九六：二三頁）と悩みがちになる。さらに、母親がこのような悩み、苦しむ理由として鈴木（一九九六）は、この「よい母親でなければならぬ」母親像の他に、「出産後の母体は、身体的にも精神的にも疲れた状態が続くが、周囲の関心はもっぱら赤ちゃんに集中し、母胎の辛い変化には寄せられない傾向があること」をあげている。これが母親の問題としてのうつ病、虐待につながる。しかも、母子保健は赤ちゃんに対するサーブिसはあり、充実しているが、母親や保護者の相談サーブिसは十分とは言えないと言う。

	項目（主なもの）	父 母	P
第Ⅰ因子 「柔軟さ」	<ul style="list-style-type: none"> ・角が取れて丸くなった ・考え方が柔軟になった ・他人に対して寛大になった ・精神的にタフになった ・度胸がついた 	2.40 < 2.83 (0.74) (0.61)	***
第Ⅱ因子 「自己抑制」	<ul style="list-style-type: none"> ・他人の迷惑にならないように心がけるようになった ・自分のほしいものなどが我慢できるようになった ・他人の立場や気持ちを汲み取るようになった ・人との和を大事にするようになった ・自分本位の考えや行動をしなくなった 	2.57 < 2.99 (0.72) (0.62)	***
第Ⅲ因子 「視野の広がり」	<ul style="list-style-type: none"> ・日本や世界の将来について関心が増した ・環境問題（大気汚染・食品公害など）に関心が増した ・児童福祉や教育問題に関心を持つようになった ・一人一人がかけがえのない存在だと思うようになった ・日本の政治に関心が増した 	2.21 < 2.60 (0.67) (0.63)	***
第Ⅳ因子 「運命・信仰・伝統の受容」	<ul style="list-style-type: none"> ・物事を運命だと受け入れるようになった ・運や巡り合わせを考えるようになった ・長幼の序は大切だと思うようになった ・伝統や文化の大切さを思うようになった ・人間の力を超えたものがあることを信じるようになった 	2.71 < 3.12 (0.73) (0.54)	***
第Ⅴ因子 「生き甲斐・存在感」	<ul style="list-style-type: none"> ・生きている張りが増した ・長生きしなければならないと思うようになった ・自分がなくてはならない存在だと思うようになった ・子どもへの関心が強くなった 	2.82 < 2.95 (0.57) (0.53)	**
第Ⅵ因子 「自己の強さ」	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の健康に気をつけるようになった ・多少他の人と摩擦があっても自分の主義は通すようになった ・自分の立場や考えはちゃんと主張しなければならないと思うようになった 	2.35 < 2.52 (0.69) (0.58)	***

注) **p<.01 ***p<.001

柏木 (1995, p.43より)

図 5 親となることによる成長・発達一次元得点平均（標準偏差）

このような指摘は、「育児」が主に子どもの成長発達に目が向けられがちだった事ともつながる。母親や父親、保護者などのかかわりが独立変数であり、子どもの成長発達が従属変数とするなら方である。育児は相互作用であり、相互作用としての母子関係、親子関係として、親の子どもへの関わり方をとらえていく必要がある。子育てを行っている母親の行動は、子どもとの関わりの相互作用の結果として起こるととらえられなければならない。

child-parent co-rearing としつつの親教育を考える —モード論の視点から—

では、親はどう育つのか。またどう育てたらよいのか。親の心理的発達を落合（一九九五）がモデル化しているように、子どもの成長・発達に伴って親も親として成長・発達する。これは一つのモデルである。またGordon（1970）の開発した「親業」は、望ましいと考えられる親の行動をスキル化し、これを「訓練」することで学習させ、親としての自信を高めている。特に高学歴の親の間での親業の拡がりを見ても、親としての自分がどう

あればよいのかを模索し、親としてあるべき姿、モデルを求めてマニュアルに走る親の姿が見えてくる。氏家（一九九六）は、母親は「育児は母親の責任であるから全力で関わらなければならない」「よい母親であるためには自分の気持ちとか感情を抑えなければならない」「自分の都合を優先してはならない」「自分で世話しなければならない」といった育児信念をもっている、という（七七頁）。

この一方で、Winnicott（1965）は「母親と幼児を管理したり、幼児や幼い子どもたちを教育したりするとなると、私たちは断固として正常ないしは健康に向かった方向性をもちつづければならないのです。そして私たちにこうしたことを教えてくれるのは多少なりとも健康な母親をおいて他にないのです。」（p. 28）と述べ、一般の母親こそが特定の赤ん坊にどのように振舞うかについて知っているただ一人の人物であるとし、母親の献身によって育児は行われるのであるから、母親に教えてやることはできない、と述べている。

こうした考え方は、確かにGordonの開発した親業のように親としてのあるべき姿や望ましい関わり方を指導することによって、他人から見た「よい親」としての関わり方だけが強調され一方的に指導され、本来その特定

の親子の特定の関わりの中でこそ育つ特有で固有の「親子関係」や「相互作用」の形成が阻害されてしまう可能性を示唆するものである。

しかし、実際の子どもの発達と親との相互作用は、日常のさまざまな出来事の積み上げによって成り立つ。そこからさまざまな問題が派生し、親はこれに何とか対処しながら子育ての日々を送っている。子どもには親を育てようという意図はないであろうが、親は子どもに育てられている。明らかに子どもをもつことによって、大人は変化し、意識は変わる（柏木、一九九五）。しかし、親の *referential frame* によって対処できない問題が発生したり、子どもが不適応に陥ることがある。これは子どもにとっても親にとっても大きな危機となる。こうした時、子どもばかりでなく親にとっても専門家の援助が必要となる。親行動の説明理論や既存の発達モデルは、問題の発生によって親がどのように変化し成長するかが予測できない。では、いかに親を援助し、子どもの問題を考えなければよいのであろうか。そこでモード論によって、この問題の解決法を提案したい。

子どもの問題を援助し、解決するための親教育 —モード論の視点からのコラボレーションの提案—

現在の学校教育の教育臨床学的問題は、教師や学校にのみ任せられ、責任を押しつけているだけでは解決しない。子どもの問題は、どのような問題であろうとも、学校、教師、親、大人、地域社会、社会全体が、これを自らの問題として考え、取り組む必要がある。

子どもたちの示すさまざまな問題は、親や教師、学校や社会が取り組むべき「課題」である。こうした課題にいかに取り組むかを考える際、一つの手がかりとして、「モード論」をここで取り上げる。「モード論」は、小林（一九九六）が Ziman (1994) の “Prometheus Bond” 及び Gibbons, Linonges, Nowotny, Schwartzman, Scott, & Trow (1994) “The New Production of Knowledge” を基に論考し、提案したものである（佐藤、一九九八）。

モード論とは、「科学の個別のディシプリンを越えて、知的な生産活動全体を規定するモード（研究活動の様式）が存在する」と考える（Gibbons, 1997）。モードには二つの様式があり、モードⅠ、モードⅡと呼ばれる。

〈モードⅠ〉…既存の科学や科学技術活動は、各ディシプリンの内部で通用する論理によつて進められてきており、取り組むべきテーマが研究者個人の知的好奇心と研究の進展に即して決まってきたこと、実用的成果を想定して研究が始められるのではないこと、研究の価値はディシプリンの知識体系の発展にいかんが貢献したかで決まること、研究成果は学術雑誌、学会などの制度化されたメディアで、ピアによる評価を経て普及する。研究者養成は大学の当該領域内で専門的に行われ、外部の人間や部外者が研究活動に参入することは困難である。これをモードⅠと呼ぶ。ディシプリン型科学の研究様式である。

〈モードⅡ〉…研究活動は社会的な活動としてとらえられている。社会に開放された科学研究のモードである。取り組むべき研究テーマは、アプリケーションのコンテキストの中で決まる。アプリケーションとはある目的に科学技術を適用、応用することを意味する。モードⅡでは、科学技術を経済発展や人類的課題の解決のための活動と位置づける。またこの問題解決に関与しうる広範な領域からの参加が求められる。interdisciplinaryではなくtransdisciplinaryである。多数のdisciplineの研究者が参加するため、個々のdisciplineに依存しない独自の理

論構造、研究方法、研究スタイルを生み出す。研究成果は参加する研究者の出身disciplineの知識体系の発展とは無関係である。存在するのは問題のフィールドであり、研究成果は問題の解決が第一である。このための独自の研究活動様式が存在する。知識の生産と消費はcoextensive（共時的）である。参加者の範囲は、大学の研究者、産業界、政府の専門家、市民をも含む。問題解決のために参加者のconfigurationによる創造性が求められる。参加者の組織化いかんによつて成果が左右されるからである。

このように「モードⅡ」は問題解決型の、多領域の専門家、問題に直面する人、市民参加型の知識生産様式と言うことができる。注意すべきは、モードⅡが単なる専門的な研究の応用ではない、と言うことである。

モード論は、教育学や心理学における理論と実践現場との不一致や乖離を考える上で、示唆を与えるものである。既述のように、児童生徒の問題は学校や教師の対処すべき問題と考えるのではなく、多領域の専門家や非専門家、親、市民、社会がその問題解決のためにコラボレートするべき問題であると考ええる。ただし知識生産活動に対する一科学的論考であり、実際の問題解決がどのよう

な方法によってどのようなにはかられか、を予測しない。これがモード論の限界と考えられる。

考察

親を育てる親教育の今後の課題

大人が親になっていく変化と発達の過程で、それを幸福だと感じたり、強いストレスを感じたり、またそれまでの行動の仕方や、場合によってはものの見方考え方、感じ方までまったく変わってしまうことがなぜ起こるのであろうか。これを説明するモデルはあっても予測するモデルは今のところ存在しない。しかし、育児、子育てによって親は変化し、成長・発達することはこれまでの研究でも明らかである。

親は妊娠、出産、育児を通して子どもと出会い、子どもを知り、それによって同時に、子どもの頃の自分を振り返り、自己と出会い、おとなになり、親として成長する。親になること、親を育てることは、教育の原点である。

今や問題となっている「学級崩壊」や他の問題が起きたとき、モード論に基づくコラボレーションは多くの示唆を与えると考ええる。その際、専門家や教師は、親を教育

する（望ましい行動や態度を指導する、教え諭す）という姿勢で接しないことが最も大切である。親は、子育てに責任を負っており、Winnicottが言うように、「母親こそがその子どもにどのように振舞うかについて知っているただ一人の人物であるとし、母親の献身によって育児は行われている」ことを忘れてはならない。したがって親に教えてやることはできない、という態度が専門家や教師に求められよう。問題をもつ子どもも親も、一番そのことで苦しんでおり、解決を求めている存在であるからである。同時に親は子どもについて最も情報をもつ存在でもあるからである。

むしろ、その子どものことをもつともよく知っている「専門家」としての母親や父親から情報を得ながら、問題を共有し、共感し、励ましつつ共に「ある」ことを体験することが求められるのではないだろうか。虐待に見られるように、子育ての問題に悩み苦しむ人こそ、最も良い親であろうとして努力し、苦しむ人であることを忘れてはならないと考える。

今回は家族心理学やAdler心理学を応用した親教育の理論、Gordonの親業などはとりあげなかった。これらの理論と応用は、実際特定の親に望ましい変化をもたら

し、一定の評価を得ているかも知れない（井上、一九八五）が、既述のようにこうした考え方は同時に「望ましい親（良い親）」や望ましい行動をとれない親というレッテルを作り出す可能性があるからである。同時に実際、親と接し、親とコラボレーションの作業をすすめる際には、むしろ既成の望ましい接し方が通用しないことが多く生じてくるからである。

本稿では、虐待に見られる親子関係を通して、親が子育てで経る成長発達のプロセスとその説明理論を概観した。同時に、親が子育てを通して親として成長する上でのようなことが必要なのかについて、モード論からの示唆を得ながら考察した。親の成長発達を援助する際、親教育とは言え、その親の子どもに関する専門家としての親への対応と親からの情報収集、最もその子どもの問題に苦しみ直面する人としての親に対する敬意と配慮の上で、教育する側、相談者（カウンセラー）が親と共にその問題を共有し共に育つ過程としてコラボレーションを考えることの必要性和意義を考察した。

引用文献

- Arizmeni, T. G., & Affonso, D. D. 1987 Stressful events related to pregnancy and postpartum. *Journal of Psychosomatic Research*, 31, 743-756.
- Biringen, S. 1990 Direct observation of maternal sensitivity and dyadic interactions in the home: Relations to maternal thinking. *Developmental Psychology*, 26, 278-284.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss*, Vol. 1, *Attachment*. New York: Basic Book.
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and loss*, Vol. 3, *Loss: Sadness and depression*. New York: Basic Book.
- Caspi, A. & Elder, Jr. G. H. 1988 Emergent family patterns: The intergenerational construction of problem behavior and relationships. In R. Hinde & J. Stevenson-Hinde (Eds.), *Relationships within families: Mutual influences*. Clarendon Press, Pp. 218-240.
- Chess, S. & Thomas, A. 1987 *Origins and evolutions of behavior disorders: From infancy to early adult life*. New

York:Harvard University Press.

Curtona, C. E. 1984 Social support and stress in the transition to parenthood. *Journal of Abnormal Psychology*, 92, 161-172.

Fraiberg, S., Adelson, E., & Shapiro, V. 1975 Ghosts in the nursery. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 14, 387-421.

Gibbons, M., Limonges, C., Nowotny, H., Schwartzman, S., Scott, P., & Trow, M. 1994 *The new production of knowledge- The dynamics of science and research in contemporary Societies*. Sage Publications.

Grossmann, K., Fremmer-Bombik, E., Rudolph, J., & Grossmann, K.E. 1988 Maternal attachment representations as related to patterns of infant-mother attachment and maternal care during the first year. In R.Hinde & J. Stevenson-Hinde (Eds.), *Relationships within families: Mutual influences*. Clarendon Press, Pp. 241-260.

橋本洋子 一九九六 新生児集中治療室における親子のコミュニケーション 渡辺久子編 母子臨床 コミュニケーション 科学 66, Pp. 27-31.

井上美沙子 一九八五 グローブの親子療法(PET)の諸

問題 家族療法と親教育 215, Pp. 146-160.

神庭靖子 一九九四 早期母子関係 斎藤学編 児童虐待 金剛出版 Pp. 58-69.

神田橋條治 一九九二 治療のつらさ 第一巻 対話するふたり 花クリニク神田橋研究会

柏木恵子 一九九五 親子関係の研究 柏木恵子・高橋恵子(編著) 発達心理学とエホニズム ミネルヴァ書房 Pp. 18-52.

小林信一 一九九六 モード論と科学の脱一制度化 現代思想 24(6), 254-264.

Lamb, M. E. 1975 Fathers: forgotten contributors to child development. *Human Development*, 18, 245-266.

Main, M. 1991 Metacognitive knowledge, metacognitive monitoring, and singular (coherent) vs. multiple (incoherent) model of attachment: Findings and directions for future research. In C.M. Parkes, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris (Eds.), *Attachment across the life cycle*. Routledge, Pp. 127-159.

Main, M. & Hesse, E. 1990 Parents' unresolved traumatic experiences are related to infant disorganized attachment status. In M. T. Greenberg, D. Cicchetti & E.M.

- Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool years*.
Chicago: University of Chicago Press. Pp. 161-182.
- Main, M. Kaplan, N., & Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 66-104.
- McCrae, R. R. & Costa, Jr., P. T. 1994 The paradox of parental influence: understanding retrospective studies of parent-child relations and adult personality. In *Parenting and psychopathology*. John Wiley & Sons. Pp. 107-125.
- 落合良行 一九九五 心理的離乳への五段階過程仮説筑
大学心理学研究 17, 51-60.
- 大野祥子 一九九八 父親であること 子どもの養育者としての役割 柏木恵子(編) 結婚・家族の心理学
ニ ネルヴァ書房 Pp. 149-185.
- Quinton, D. & Rutter, M. 1988 Parenting breakdown: *The making and breaking of inter-generational links*. Avebury.
- 坂井聖二 一九九四 小児科領域からみた児童虐待 斎藤学(編) 児童虐待 金剛出版 Pp. 47-57.
- 斎藤学 一九九四 児童虐待 金剛出版
- 佐藤達哉 一九九八 教育心理学における知識生産活動
を考えるモード論的アプローチ 日本教育心理学会第
四〇回総会発表論文集 S38-S39.
- Simons, R. L., Lorenz, F. O., Wu, C., & Conger, R. D. 1993
Social network and marital support as mediators and moderators of the impact of stress and depression on parent behavior. *Developmental Psychology*, 29, 368-381.
- 莊巖舜哉 一九九七 文化と感情の心理生態学 金子書房
- 鈴木廣子 一九九六 週三期精神保険と拇指臨床 渡辺久子(編) 母子臨床 こころの科学 66, 22-26.
- 氏家達夫 一九九六 親になるプロセス 金子書房
- Ventura, J. N. 1987 The stresses of parenthood reexamined. *Family Relations: Journal of applied Family and Child Studies*, 36, 26-29.
- Winnicott, D. W. 1965 *The family and individual development*. London: Tavistock Publications Ltd.
- Ziman, J. 1994 *Prometheus Bond: Science in a dynamic "Steady State"*. Cambridge University Press.